

## まえがき

21世紀は太平洋の世紀だと言われる。事実すでに世界のGNP総計の50%は太平洋を取り巻く国々や地域で産出され、全世界の貿易総額の40%は太平洋とその周辺の海と空の上を流れている。しかも地球表面の3分の1を占める巨大な太平洋にはいまだ予想もつかないポテンシャルが秘められていると考えられているのだ。更に、太平洋は、古代において地中海が担った役割、すなわち、エジプト、フェニキア、ギリシャ、カルタゴ、ローマなど偉大なる諸文明の間をとり持ち、相互に刺激を与えあい、一層の文明の推展をもたらすというあの諸文明の母胎の役割を果たそうとしている。現代においては神々の主神ゼウスの兄弟神、海神ポセイドンを擁するのはもはや地中海(それはすでに辺境の内海に転落して久しい)ではなく、太平洋こそがふさわしい。21世紀から後、世界史の檣舞台の役割を演じるのは間違いなく太平洋であろう。

本書の母体となったアジア経済研究所における「海洋島嶼国家の原像と変貌—太平洋を中心として—」はこうした文明史的パースペクティブのもとに成立した。そして、海、とりわけ大洋としての太平洋上に浮かぶという運命的な地理的条件の中に置かれた太平洋の島々は、太平洋の文明史的興隆にもなって、新たな、かつてない歴史的使命を与えられようとしている。

島々の人々は、太平洋を自分達の生を取り巻き包みこむ揺籃として、ユーラシア大陸に生じた数千年の変動の歴史から守られ続けてきた。これらの島々は、大陸に成立した諸社会とは異質の社会を独自に創り上げてきた。

しかし、近代ヨーロッパの技術文明が大洋を征服したことにより、これら太平洋の島々の運命も一変し、それまで隔絶されてきた大陸出来の世界史の中に取りこまれることとなった。が、島々は大陸の国々や諸地域が示したのとは異なる特異な反応を、この近代西洋文明による世界史への包摂の際にも示した。まぎれもなく、海に囲まれた社会には、大陸の中に成立した社会とは異なった原理が作用しており、それが、世界史に包摂される際にも独特の

働きを示したのである。この海に囲まれた社会とそこに住む人々の示す独特のあり方を、我々は、国家という側面に注目して海洋島嶼国家の原像と名付けたのである。そうした海洋島嶼国家の原像は、近代西洋文明の太平洋進出とともに変貌を余儀なくされながらもなお、変貌の表面下で作用を及ぼし続けている。その原像と変貌の間のダイナミックな力のやり取りを豊富な事例を提示しながら浮き彫りにすること、これが我々が本書を産み出す研究会において、志したことであった。そして、来るべき世紀に太平洋の海洋島嶼国家群が新たな大洋との関係を創り上げるに際して、海洋島嶼国家の原像と、それがこれまで閲してきた変貌の中から、可能性の萌芽とも呼びうるものを僅かでもつかみ出せればと念じて、各委員は報告を行い、激しい議論の応酬を交わした。そこから生まれた産物が本書である。二年という研究期間の制約、そして、触れることのできなかつた数多くの島々に想いは残るが、我々は与えられた条件のもとで最善を尽くしたものと確信している。

この書が、21世紀を迎えるに当たって、太平洋上に浮かぶ海洋島嶼国家の一つである日本に生きる読者に、ありうべき一つのヴィジョンを指し示すことができたとしたならば、執筆者一同、これに優る喜びはない。

最後に、この場を借りて、研究会に毎回出席され、大黒柱として活発に議論を領導して下さった早稲田大学の川勝平太先生、定かならぬ運命に置かれていた原稿の山を本書にまで結実させて下さった地域研究部の佐藤宏部長、本書作成の過程で危地に陥る度に、救いの手を差し伸べて下さった調査企画室の木村陸男さん、本研究所の出版物としてはいささか異色の原稿群を好意的に、しかも学問的にはあくまで厳密に検討して下さったレフェリーの方、そして本研究会の資料面をがっちりバックアップされ、常にその微笑みと適切な助言を以って、トロイア攻城戦におけるパラス・アテーナーの如き守護女神の役割を演じて下さった立山愛子さんに深甚なる感謝の念を捧げたい。